



熊本県山都町
やまぢょう
町勢要覧

山の都の
ものがたり

Yamato Story 2018

山都の地勢	3
山都の叡智のものがたり【通潤橋】	5
山都の伝統のものがたり【清和文楽】	7
山都の栄華のものがたり【阿蘇氏の伝説】	9
山都の歴史のものがたり【日向往還】	11
「山の都」の未来に光をあてる人づくり	13
私たちの町「山都」“子育て世代編”	15
「山の都」の特性を活かした魅力ある産業づくり	17
私たちの町「山都」“高校生編”	19
「山の都」での暮らしを守る環境づくり	21
山都の空は 今日も キラキラ 【山都町のキャンプ場と清和高原天文台】	23
「山の都」の個性が輝く地域づくり	25
私たちの町「山都」“移住者編”	27
効果的な行財政運営	29
山都町長あいさつ	30

表紙イラストについて

美しい山々が連なり、夜には満天の星がキラキラと輝き、国の特別天然記念物に指定されているニホンカモシカが今もお生息している山都町。その豊かな自然を背景に、「少女神楽」とよばれる巫女神楽を舞う神秘的な少女の姿を山の都の象徴として描いています。

「少女神楽」は、毎年4月3、4日に行われる男成(おとこなり)神社の春季例大祭で披露される伝統芸能です。元々男性が舞っていましたが、戦時中に男性がいなくなり、代わりに女性が舞うようになったことから始まりました。男成神社の名称は、阿蘇氏の元服がとり行われていたことから「男成」とよばれるようになったと地元では伝えられています。(阿蘇氏については本冊子9~10ページ「山都の栄華のものがたり」をご覧ください。)

少女とともに描かれている青い鳥は町鳥「オオルリ」です。



男成神社(山都町男成)

輝く!! みんなでつくる 「山の都」の ものがたり

山都町は、通潤橋にまつわる「叡智のものがたり」、「清和文楽や神楽に代表される「伝統のものがたり」、阿蘇氏の興亡の舞台となった「栄華のものがたり」、そして日向往還の「歴史のものがたり」など、華やかで逞しい「ものがたり」が繰り広げられてきた、まさに「山の都」です。

豊かで美しい自然に恵まれており、滝や溪谷など景色の良い場所がたくさんあります。平成27年には、五老ヶ滝(ころうがたき)と聖滝(ひじりだき)が「肥後領内名勝地五郎方瀧・聖り瀧」として国の名勝に指定されました。流れる川には山女魚(ヤマメ)など、きれいな水辺だけにすむような魚が泳いでおり、農家の話では時々田んぼに流れこんでくることもあるそうです。森や林では、今では見ることが珍しい野生の植物が根を張り、その周りを、町鳥の「オオルリ」をはじめとする野鳥のさえずりが賑やかに響き渡っています。夜になると、手を伸ばせば届きそうなほどの満天の星がキラキラ輝き、天の川を見ることができます。春夏秋冬、飽きることもない景色、美味しいお米や野菜、澄んだ水と空気、そして、そこで暮らし生かされている私たち山都町民が、この町のものがたりをつくっています。

あゆのせおおはし 平成11年、緑川をまたぐ、山都町菅(すけ)地区と白藤地区を結ぶ農免道路整備事業(あぐりろーど鮎ノ瀧)の一環として開通しました。「くまもとアートポリス」プロジェクトによるデザイン(建築家 大野美代子氏)で、高さ140m、長さ390mのY字橋脚と斜張橋との複合型のとてめずらしい橋です。緑川が刻んだV字谷を渡る姿は、自然環境との調和に配慮しながらも意外性を感じさせる斬新な構造となっており、橋の上やたもからは緑川の溪谷の風景を眺めることができます。「土木学会デザイン賞2002」で最優秀賞を受賞するなど、そのデザイン性が高く評価されています。橋のたもには「鮎の瀧交流館」があり、地元菅地区でとれた新鮮な野菜・良質の米・加工品などの販売を行っています。【所在地】熊本県上益城郡山都町菅488-1 【駐車場】30台

九州中央自動車道*「北中島 IC (仮称 熊本市方面のみのハーフインター)」

平成30年度 供用開始予定

*法定路線名は「九州横断自動車道延岡線」

九州横断自動車道延岡線(九州中央自動車道)は、嘉島JCTから宮崎県延岡市に至る延長95kmの高速自動車国道であり、九州のほぼ中央で九州縦貫自動車道と東九州自動車道を結び、これらと一体となって九州の中部・東部地域の広域的な連携、物流の効率化及び地域の発展等を支援する自動車専用道路です。

※「北中島 IC(仮称)熊本市方面のみのハーフインター」は平成30年度開通予定、「北中島 IC(仮称)矢部 IC(仮称)方面のみのハーフインター」と「矢部 IC(仮称)」は開通年度未定です。

(平成30年3月現在)

日向往還

【HYUGA - OKUAN】

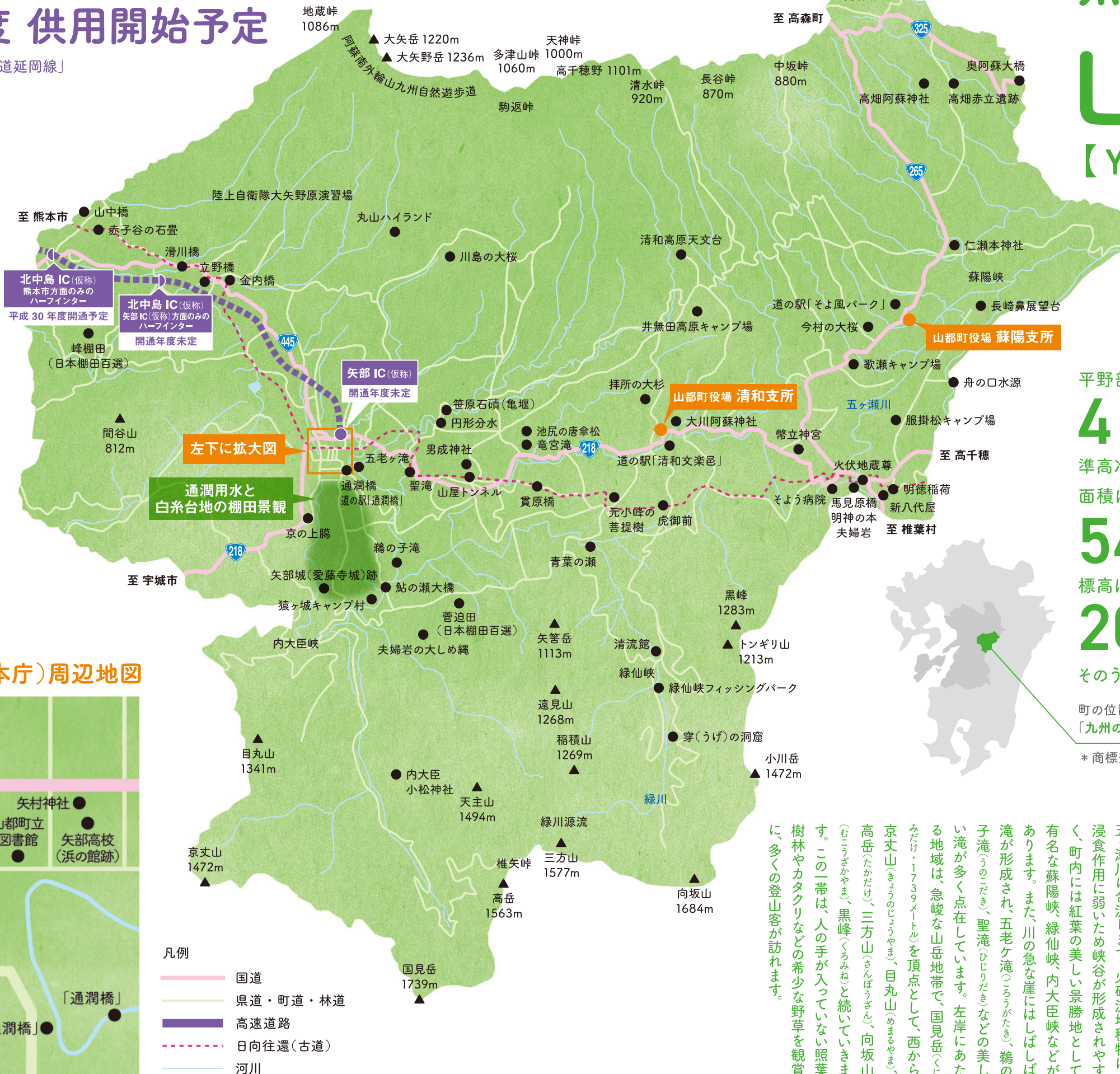
現在の熊本県熊本市と宮崎県延岡市を結ぶ旧藩時代の古道です。

詳細は本冊子11~12ページ「山都の歴史のものがたり」をご覧ください。

山都町役場(本庁)周辺地図



★印…大造り物小屋



凡例

- 国道
- 県道・町道・林道
- 高速道路
- - - 日向往還(古道)
- 河川

熊本県 KUMAMOTO PREFECTURE

山都町

【YAMATO - CHO】

平野部との気温差は、各月平均で

4℃ほど低く

準高冷地の気候です。

面積は、県内の自治体で3番目に広い

544.67km²

標高は、

200m~1700m

そのうち居住域は200mから900mにあります。

町の位置が九州島のほぼ中央にあたることから「九州のへそ*」の町としても知られています。

* 商標登録第2430829号

山都町は、世界最大級の阿蘇カルデラを形成する南外輪山の南麓一帯と九州脊梁山地に属する山岳地帯を町域とします。一級河川である緑川、五ヶ瀬川は町内の山間部にある水源を源流とし、分水嶺を境にそれぞれ東西に流れています。緑川を境に、右岸の南外輪山の準高原地帯と左岸の九州脊梁山地の山岳地帯に分かれます。右岸の準高原地帯は、阿蘇カルデラが形成されるときに噴出された火砕流堆積物に覆われている台地で形成されています。外輪山山頂部を水源とする小河川は、大小多数の谷を形成し、緑川若しくは五ヶ瀬川に合流します。火砕流堆積物は、浸食作用に弱いため峡谷が形成されやすく、町内には紅葉の美しい景勝地として有名な蘇陽峡、緑仙峡、内大臣峡などがあります。また、川の急な崖にはしばしば滝が形成され、五老ヶ滝(ごろうがたき)、鶴の子滝(つの子たき)、聖滝(ひじりたき)などの美しい滝が多く点在しています。左岸にあたる地域は、急峻な山岳地帯で、国見岳(くにみだけ)・1739メートルを頂点として、西から京丈山(きやうぢやま)、目丸山(めまるやま)、高岳(たかだけ)、三方山(さんぼうざん)、向坂山(むこうざかやま)、黒峰(くろみね)と続いています。この一帯は、人の手が入っていない照葉樹林やカタクリなどの希少な野草を觀賞に、多くの登山客が訪れます。

山都の叡智のものがたり



通潤橋

清らかな水と、大きな寒暖差。山都町は、恵まれた自然が育む良質な農作物の産地としても知られています。しかし白糸台地においては、笹原川をはじめとする4つの河川に四方を囲まれながらも深い谷によって水の利用を阻まれていました。そんな窮状を救ったのが、惣庄屋であった布田保之助（ふたやすのすけ）でした。道路や橋の新設、用水路の延長など多大な功績を遺した布田保之助の、最期にして最大の大事な。それが、日本最大の石造アーチ水路橋「通潤橋（つうじゅんきょう）」の建設です。

通潤橋は、「通潤用水」と呼ばれる水路の一部。橋の北側から取り込まれた農業用水が、橋の上部に埋設されている凝灰岩製の3本の通水管を通り、白糸台地へと流れていきます。逆サイフォンの原理を応用した巨大な水路橋です。前代未聞の大事業であり、藩の許可を取り付けるだけでも大変な苦勞があったという通潤橋の建設。布田保之助をはじめ事業に関係する地域の人々は、熊本城の石垣にヒントを得て当代一の石工集団「種山石工（たねやまいしく）」に協力を要請、粘り強く試行錯誤を繰り返し、気の遠くなるような作業を積み重ねました。そしてついに通水が叶ったその日、村は天を揺るがすほどの大歓声に包まれたといいます。

国の重要文化財にも指定された通潤橋



白糸台地の棚田



円形分水（撮影：押川嘉東）

円形分水は笹原川の水を白糸台地と野尻・笹原地区に送る分水装置で、1958年（昭和31年）に造られました。内円筒と外円筒からできており、内円筒の直径は6.3m。底の中心にある1.5mの水の湧き出し口からは、すぐ傍を流れる笹原川から取水した水が毎分約1.2トン湧き出しています。湧き出した水は内円筒からあふれ、白糸台地と野尻・笹原地区の耕作面積に応じて、両地区の水路に公平に流れるよう工夫されています。



は、今なお現役の水路橋として、円形分水（写真左下）で分水された農業用水を白糸台地（写真左上）に届けています。また、通水管にたまった土砂や堆積物を取り除くために行われてきた迫力満点の放水は、貴重な観光資源としても町の潤いに一役買っています。2008（平成20）年には通潤橋を渡った水で潤されている白糸台地一帯が「通潤用水と白糸台地の棚田景観」として、国の重要な文化的景観に選定されました。布田保之助が心を砕き、職人も村民も一つになって成し遂げた大事業は、今日も「山都の叡智のものがたり」として語り継がれています。

布田保之助（ふたやすのすけ）
1801年（享和元年）、肥後国矢部に誕生。
54歳の時に、全長75・6m、高さ20・2mの巨大な石造アーチの水路橋・通潤橋を完成させた。

山都の伝統のものがたり



清和文楽(せいわぶんらく)とは、山都町(旧清和村)に脈々と受け継がれてきた人形浄瑠璃を指します。江戸時代、竹本義太夫の義太夫節と近松門左衛門の物語によって全盛期を迎えた人形浄瑠璃。この地に人形浄瑠璃が伝えられたのは江戸時代末期のことです。巡業で訪れていた淡路の一座から浄瑠璃好きの農家の方々が人形を譲り受け、操り方を習ったのが清和文楽の起源といわれています。

清和文楽の一座は主に農家で構成され、大川阿蘇神社の農村舞台で披露したり、近隣地域の行事に招かれたりと、技術を高めていきました。子どもたちは、大人が集まって人形の練習をする様子を見ながら育ち、やがて大人になって自分も人形を探る。文楽は農村文化の一部として継承されてきたのです。

明治時代の末期には一時衰退し、昭和2年に入り復活。その後も盛衰を繰り返した清和文楽ですが、昭和54年、清和文楽人形芝居が県の重要無形文化財に指定されたのを機に、村おこしとして清和文楽の再生を期しました。そうして誕生したのが、九州唯一の人形浄瑠璃専用の劇場『清和文楽館』です。

『清和文楽館』は、後世に残る文化的資産の創造を目的とした「くまもとアートポリス」の一環として建設されました。特に文楽を上演する「舞台棟」は木の風合い

が美しく、温かみを感じさせます。この舞台では、清和文楽オリジナル・小泉八雲原作の「雪おんな」や、「絵本太功記(たいこうき)」「傾城阿波の鳴門(けいせいあわのなると)」など、年間約200回の公演が行われ、太夫語り、三味線、人形遣いがひとつになった「三業さんきょう」一体の芸を披露しています。また、その活躍の場は町を飛び出し、各地での出張公演も開催。遠くはアイルランド、イタリア、ギリシャなど海外公演も大成功を収めました。

近年では太夫・三味線・人形遣い、3名が本場・淡路にて研修を行うなど、次世代への継承にも積極的に取り組んでいます。清和文楽と並び、地域で大切に守り伝え続けた伝統芸能のひとつに、神楽があります。毎年1月下旬に開催される「九州山地神楽祭り」では、仁瀬本(にせもと)神社神楽・高畑(たかはた)阿蘇神社神楽・白石神楽に加え、近隣町村の神楽を楽しむことができます。

また、夕刻から夜にかけて奉納され、幻想的な空気に包まれる「夜神楽(よかぐら)」は、太古の昔から変わらぬ神々への畏怖と敬意を今に伝えています。清和文楽館(火曜休館/祝祭日は開館) ☎0967・82・3001 営業時間 午前9時〜午後4時半 公演日時については、お問い合わせ下さい。神楽についてのお問い合わせ先 蘇陽支所 ☎0967・83・1111

熊本県に残る唯一の人形浄瑠璃「清和文楽」人形芝居は、太夫・三味線・人形が一体となり、登場人物のせりふ、会話、物語の展開、情景を表現し、人形が人間の役者以上に深く物語を演じる総合芸術です。

2013年に山都町出身の渡辺奈津子さん、山下真衛さん、岡本翔さんの3名が兵庫県淡路市に修行のため入門。2年後の2016年4月にお披露目公演が行われました。



「九州山地神楽祭り」山都町の仁瀬本神社神楽、高畑阿蘇神社神楽、白石神楽の各保存会をはじめ、近隣地域に伝わる神楽の保存会が、特徴ある舞をダイジェスト版で披露します。

